

年中行事にみる多民族社会「アメリカ」

広島県広島市立安佐中学校 梶 典之

山口県防府市立富海中学校 石丸 義臣

山口県立宇部高等学校 野村 卓也

1 はじめに

祝祭行事や年中行事はどのような社会にも存在し、その社会の構成者は、それらに参加することにより、その社会固有の、考え方・感じ方・行動様式を共有している。そして、それらを共有し伝承していく過程で共同体が持つ伝統的価値観が形成される。従って、社会を国家ととらえると、その国家の国民性や文化の重要な要素は祝祭行事や年中行事の中に凝縮されていると考えられるであろう。

このような仮説を基に本研究では、H米の祝祭行事・年中行事を様々な視点から比較し、その共通点、相違点を探ることにした。

比較の視点としては、各行事の、「由来・意義、祝い方、伝承方法」を設定した。そして、今回の現地調査では、アメリカ合衆国の代表的な年中行事である、ハローウィン・感謝祭（サンクスギビング）・クリスマスを取り上げ、家庭・地域・学校の各場面について調査し、行事の変遷にも着目することにした。調査場所には、学校・資料館・役所・新聞社・ホームステイ先の家庭などを選んだ。

調査活動の最初の打ち合わせで、ECUのE・ベル教授から、上記の行事以外にアフリカンアメリカンや、ネイティブアメリカン、ユダヤ人社会の行事を紹介されたとき、われわれの事前調査と研究仮説には、「多民族社会アメリカ」という視点が弱かったという事実気がついた。ベル教授の話によれば、「多民族社会」という現実がアメリカ社会とその文化に及ぼしている影響はわれわれの予想以上に大きく、ヨーロッパ文化に由来する年中行事だけの調査では、アメリカ社会の一面的なとらえかたしかできないと考えられた。

そのため、多民族社会アメリカという視点から調査計画を練り直し、当初の三行事に並行して、アフリカンアメリカン、及び、ネイティブアメリカン（インディアン）の諸行事についても調べることにした。

2 現地調査の概要

実際に現地調査を始めると、日本でもよく紹介されている上記の三つの行事は、学校や家庭でも何らかの形で伝承されていた。ただし、合衆国憲法に政教分離が明記されているので、公立学校では宗教的行事ではなく文化的行事として扱われていた。小学校では各教科を総合的に学ぶのに適切な教材として年中行事を積極的に授業の中に取り入れている。この点は日本の小学校にも共通することだった。一方、中学校では、教材として年中行事

を扱うことは少ないようである。例えば、エイドゥンミドルスクール（グリーンビル）では、サンクスギビングの時には、伝統料理をカフェテリアで食べる程度である。

また、訪問した学校のほとんどで、問題を持つ生徒を形容するのに「ホープレス」「ヘルプレス」という言葉がしばしば使われ、またスクールバイオレンスなどの問題も指摘された。この背景には、一概には言えないが、人種差別や経済的不平等など複雑で多様な社会問題があるようだ。さらには、アフリカンアメリカンやネイティブアメリカンなどの生徒の無力感、民族のアイデンティティーの問題と深く関わりがあると指摘する先生も少なくなかった。現地調査の初期の段階でこの「民族のアイデンティティー」の問題に出会い、改めて多民族社会の民族の問題の難しさを痛感した。そして、この問題の解決のために始まった様々な取り組みに焦点を当てて調査を開始した。

（１） ダウンタウンオープンスクール（ミネアポリス）

— サンクスギビング、ハローウィン —

この小学校では、例えば、サンクスギビングの季節には、生きた七面鳥を生徒の前に教材として提示する。生徒は、単にサンクスギビングの由来・意義の説明を先生から聞かされるだけでなく、生きた教材を前に家禽類としての七面鳥の理科的学習を行い、また、その由来をドラマ化し、ピルグリムやインディアンに扮装し劇を演じる。さらに、調理の学習として家から持参した野菜を使って伝統料理であるスープやコーンブレッドをつくる。

また、ハローウィンの時には、毎年仮装のテーマを決める。蜘蛛がテーマの年には、理科では昆虫の学習として蜘蛛を扱い、国語では蜘蛛にまつわる伝説を学習し、算数では数字の8を使った計算練習をするというような取り組みをしていた。

また、他地域・他国のハローウィンについても調べて異文化理解の教材にしたり、クリスマスには、他国の様々な行事も学習する。例えば、アフリカンアメリカンのクワンザ、ユダヤ人のハナカ、タイのロイクラソン、インドのデワリ、スウェーデンのセントルシアなどの諸行事を扱っている。この学習は、多様な民族的背景を持つ生徒たちがお互いを理解することを目的にしている。そして、相互の理解がさらに国際理解にまで発展する事を願って取り組んでいる。

（２） スパイトミドルスクール（グリーンビル）

— クワンザ —

この行事は、1966年にカリフォルニア州立大学のマウラナ・カレンガ教授によってつくられたもので、アフリカンアメリカンの伝統や価値観を学習し、彼らに固有の黒人文化を祝うものとして始められた。「クワンザ」とはスワヒリ語で「初物」を意味し、アフリカのほぼ全土で行われる、この初物を祝う風習にちなんで、カレンガ教授が命名した。

期間は12月26日から1月1日までの7日間で、それぞれの日に以下の7つの原則を誓い合う。

- 1日目＝ウモジャ（団結） 2日目＝クジチャングリラ（自律）
- 3日目＝ウジマ（協調） 4日目＝ウジャマ（経済協力） 5日目＝ニア（目標）
- 6日目＝クンパー（創造） 7日目＝イマニ（忠誠）

家族は、毎晩それぞれの原則について語り合い、黒、赤、緑のろうそくに火をつける。

そして、それをキナラと呼ぶ7本立ての燭台に掲げることによって、その原則に光と命を与える。12月31日の夜には、コミュニティにおいて多くの家族が一同に会し、カラムと呼ばれる祝宴につく。装飾にはアフリカを象徴する、赤・黒・緑が使われる。そして、大人も子どももこの夜には、アフリカの民族衣装を身につける。

実際に、この行事に関わっているスパイトミドルスクールのフォックス先生は、クワンザの目的として、アフリカンアメリカンの生徒たちへの民族教育をあげられ、次のように述べられた。「アフリカンアメリカンの子どもたち（特に男子）の中には強い無力感を持っている者がおり、将来への希望を失っている者も少なくない。その子たちを救うためには、やればできるという意識を育てることが大切で、そのためにも自分のルーツを知り、民族としてのアイデンティティを確立することがとても重要である。」

この行事は地域社会を中心に行われ、フォックス先生のように、リーダーとして地域の中に入り、この行事を通して民族教育を推進している人もいる。

(3) ナイアーシン スクール (ミルカシオ、ミネソタ州)

— パイプセレモニー —

この学校は、カジノの収益で建設され、インディアン（オジブウェ族）独自の文化をカリキュラムに入れている点で大きな特色がある。オジブウェ族のための民族教育的側面として、「異文化理解を尊重する教職員によってオジブウェ語とその文化を教え、批判的な思考力、問題解決能力を育てること」を学校の主要な教育目標の一つとしている。

例えば、生徒は部族語のオジブウェ語を毎日30分学習し、四季折々の部族の伝説を学び、時には伝統料理をつくったりもする。

また、毎週月曜の朝には、「パイプセレモニー」と呼ばれる部族の伝統的儀式を行う。この儀式は校舎内のホールで行われ、生徒たちは輪になって座り、各自の目標を口に出しそれを誓った後にタバコのパイプを少しふかし、それを次の者に回していく。これは、かつてオジブウェ族はパイプの煙は、そのパイプを吸う者の異形であると信じていた。また自分の夢や希望はパイプの煙となって天に届けられると信じていた。これらの発想から生まれた儀式の一形態としてパイプセレモニーは今日まで伝承されてきた。

この学校の抱える大きな問題の一つに部族全般に蔓延しているアルコール依存がある。学校がある地域には1700人のオジブウェ族が住んでいるが、校長先生の話では、家族の中にアルコール依存の者がいると子どもたちも何らかの形で影響を受けてしまうということである。例えば、母親がアルコール中毒の場合早産になり、その後の成長にも支障をきたすことが多く、学校教育を困難にしている。

彼らがこのような状況にある理由としては二つのことが考えられる。一つには、彼らがアメリカ国内で「二重の差別」（「二重の差別」とは、まず、白人の中には彼らを人間として見なしていない人がいること。次に、政府の援助で生活している人への侮蔑の視線である。）を受けているという厳しい現実である。

二つ目には、白人社会への同化を余儀なくされ、自文化を失いつつあるという現実ではないだろうか。

親たちにとっては、この状況を変えていくことはきわめて難しいようで、子どもたちの可能性にかけようとする先生方の情熱がこの学校を支えているように思えた。

3 まとめ

サンクスギビング、ハローウィン等の伝統行事は、商業主義の進展や時間の経過によりその本来の意義を失いつつあるという面もあるが、学校では文化的行事として教材化されたり、家庭でも伝統料理を介し家族団らんの場として定着している。このあたりは、日本の伝統行事にも見られる事であり、共通する部分と考えると良いだろう。

しかし、我々に新しく紹介されたものは、例えばクリスマスの季節に並行して行われる、アフリカンアメリカンのクワンザや、ユダヤ人のハナカであった。同じ季節に異なる民族の異なる行事が存在する事は、日本人である我々にとっては大きな驚きであった。しかし、WASP（白人で、アングロサクソンで、プロテスタント）以外にもアフリカ系、アジア系、ヒスパニック系など様々な民族で成立している多民族社会アメリカにとっては当たり前のことなのである。これが、日本とアメリカの伝統を比べたとき、大きく異なっている点である。

建国以来、移民の多くは、民族的・文化的価値観の相反に悩まされてきた。これは、文化的主流を占めていたアングロサクソンと、他の民族との対立でもあった。先住移民であるアングロサクソンは、他の移民に対して、自文化への同化を強く促した。例えば、白人のアメリカ人が非白人の子供を養子にとったとき、しばしばその親は、子供を「小さな白人」に育てようとする。そして、その子供も多くの場合、白人の文化、行動様式を身につける。時には、自分の肌さえも白人になったかのような錯覚に陥る。しかし、残念なことに、学校においても友達に彼を自分たちの一員だとは見なさない。このことが、しばしば民族的アイデンティティーの崩壊やさらには、問題行動となって現れる。

このように、少数民族（マイノリティー）の多くは、自分の民族の文化的遺産を放棄してまで、アメリカ社会の主流であるアングロサクソンの価値観や行動様式に同化せざるを得なかった。しかし、自民族の文化的遺産を放棄する事によって、自己のアイデンティティーの確立・統合は可能なのか。この疑問が、多くの少数民族の間に、自文化を大切に民族的アイデンティティーを確立しようとする動きを生みだした。彼らは、自分たちがどこからきて、どういう文化を持った民族で、これから、どう生きていくのかを、自問している。その事により、自己の内部に自信と誇りを取り戻そうとしている。

このようなそれぞれの民族の動きにより、アメリカ社会はヨーロッパ（白人）文化中心の社会から、文化的多元主義の社会へと変わろうとしている。少数民族が平等な権利を求める運動の代表的な例として、文化の根幹たる母語に対する権利の主張がある。今回訪問した、「ナイアーシンスクール」にも、はっきりとその動きが見られた。

また調査の過程では、民族相互の理解の為に、多様な文化を平等に学ぼうとする様々な動きを見ることができた。

学校では、多様な民族の伝統行事を教材化することにより、生徒個々の背景に迫り、民族としてのアイデンティティー、意欲や希望を復活させようとしている先生の姿に出会った。ミネアポリスDTオープンスクールのクリスティン先生は、「民族の自覚や、誇り、伝統を失った子どもや家族には、精神的、情緒的な安定がない」という話をされた。そして、「だから、教師が文化の一部となって、生徒に伝えてやらなければ」と先生は結ばれたが、この言葉から、現状への危機感が先生方の原動力になっていることも実感として伝

わってきた。

そして、グリーンビルのメイリー・W・フォックス先生は、民族の正しい理解に加えて、物質主義、商業主義や個人主義に抗した、新しいパリュウシステム（価値体系）の必要性を説かれた。それは、ポストモダンとしての自然との共生などを模索するものだった。

これらの実践は、ヨーロッパ文化（白人文化）中心の社会から、多民族の独自性を尊重した社会を模索したものである。このプロセスで、多様な民族の多様な文化が混ざりあい、新しいアメリカ文化、新しい伝統が生まれてくるのではないだろうか。

ECUのベル教授は、このプロセスを次のような言葉でまとめられた。

「民族の正しい理解とは、まず自分自身を知り、自分自身と仲良くすることである。それが、他民族を理解することにつながる。その結果、民族や人種の背景を越えて人々が交流できる社会が実現できるだろう。」

まさしくこのベル教授の言葉通り、我々はこの調査を通して、日本人とは何か、日本文化、日本の伝統とは何かを、改めて考えさせられた。日本では、民族的アイデンティティの問題は切迫感をもって考えられることは少ない。だから、伝統的価値観の変化にも鈍感になっているのかも知れない。

しかし国内には、多くの在日朝鮮人や、アイヌモシリ、それから年々増加の一途をたどる外国人労働者などを取りまく問題が間違いなく存在している。これらの事実を直視するところから、真の国際理解、異文化理解が生まれてくるのではないだろうか。

現地調査及びワークショップの日程とその主な内容（チームD）

日時	日程・場所	主な内容	協力者
8/1(月) 9:00	ロックスプリング	ベル先生との打ち合わせ 「カンザ」「ハナカ」について 初めて紹介される。	E.ベル
12:45	ECUライブラリー	調査に必要な、資料・文献の 依頼	E.ベル
13:15	The Daily Reflector (グリーンビルの地方紙)	地域の行事及びNIE資料の 依頼	E.ベル G. WALTER
14:15	Aydenミドルスクール	SpeightミドルスクールのM. fox先生からKWANZAについて、説明を受ける KWANZAは、1966年から始まった行事で、黒人の民族教育の一貫として一部の地域で行われている。12月26日から1月1日まで、アフリカの伝統的儀式やゲームなど多様な内容で構成されている。 この行事が始まった背景にはアフリカン・アメリカンの生徒の中に強い無力感を持った者や学習の遅れがちな生徒が増加してきたという事実がある。これらの問題を解決するためにKWANZAは以下のことを目的にして行われている。 自然と共生してきた祖先の歴史を知り、そのことからヨーロッパ人と自分達の生き方・価値観の違いを認識する。そして、自己の内面に民族としての誇りや、アイデンティティーを確立	M. fox E.ベル

日 時	日 程 ・ 場 所	主 な 内 容	協 力 者
<p>8 / 2 (火) 9 : 3 0</p>	<p>A y d e n ミ ド ル ス ク ー ル</p>	<p>する。</p> <p>学校外の地域の行事であるが、教師の中には、地域に入り込みリーダーとして積極的に参加している者もいる。</p> <p>F o x 先生も参加しておられて、先生の説明には民族教育に対する強い信念と情熱、使命感が感じられた。</p> <p>郊外に位置する公立中学校である。広大な敷地に一階建ての校舎が余裕をもって建っており、設備面では日本の公立中学校はかなり遅れていると感じた。学校行事や民族教育について説明を受ける。</p> <p>K W A N Z A、ハナカについては特別な取り組みはしていない。ハローウィンなど一般的な年中行事については、特定の民族や宗教に偏ることがないように配慮しながら行っている。</p> <p>例＝カフェテリアで行事に関係のある食事をする。</p> <p>この地域にも日系やアイルランド系の企業が進出してきているので、異文化理解や外国語教育の必要性を痛感している。</p> <p>社会科では国際理解のためのカリキュラムを組んでいる。</p> <p>昼食もハンバーガーを用意していただき、食べながらおみやげの交換やお互いの資料の交換などで交流をはかった。</p>	<p>E.ベル D. Street er</p>

日 時	日 程 ・ 場 所	主 な 内 容	協 力 者
<p>8 / 3 (水) 9 : 0 0</p>	<p>J . H . R o s e High school</p> <p>The Daily Reflector</p>	<p>郊外にある公立高校で、昨年 からリソースポリスマン（学校 づめポリスマン）を入れ、安全 面の確保で大きな成果をあげて いる。</p> <p>ポリスマンを入れた理由は、 生徒に、社会の規律の存在とそ の重要性を教えるためである。 だから、授業にゲストとして参 加することもある。ベル教授の アンケートによれば、生徒の大 部分が、ポリスマンがいたほう が安全だと考えている。</p> <p>生徒が銃などの武器を持つ理 由は、自己防衛や他人への威嚇 銃を持つことで自分が強くなっ たような気になることなどがあ げられた。</p> <p>意見の相違を武器や暴力では なく言論によって解決する力を 育てるため、ピアメディエーシ ョン（生徒同士による問題解決） のプログラムに取り組んでいる</p> <p>全米N o 1 校長にも選ばれた ことのある校長先生から、優れ た学校管理能力の一端が感じら れた。</p>	<p>E . ベル</p>
<p>8 / 3 (水) 1 4 : 0 0</p>		<p>N I E (Newspaper In Educa tion) についての説明を聞く。 NIE の目的は、新聞を授業に取 り入れることで、生徒に、新聞 の役割、読み方、楽しみ方を教 えることである。また、新聞を 読むことは、現実の世界の学習 であり、このことで、世の中の</p>	<p>E . ベル G . Walter</p>

日 時	日 程 ・ 場 所	主 な 内 容	協 力 者
8/7(日) 10:00	L u t h e r a n の 教 会	<p>動きを常に意識する生徒が育つことも大きな目的である。</p> <p>ノースカロライナ州では、教師がNIEのマニュアルを作成、実践しており、その資料についても紹介してもらう。</p> <p>最後に、グリーンビル周辺の問題について説明をうける</p> <p>説明後、新聞社の記者からインタビューを受ける。</p> <p>日本の教育の現状、問題点、保護者の教育観等について答えた。</p> <p>University Lutheran Church of hope (ルター派の教会) 2・300人収容の教会は、後ろに空席がある程度でほぼ満席配布された本日の綿密なプログラムに沿って進行される。</p> <p>ホルンコンサート 歌→祈り→歌→祈り→ 牧師の子供たちへの話 歌→祈り→歌→祈り→ 途中、周囲の人との握手やスピーチが挿入。 牧師のスピーチが後半のメインホルンコンサート 音楽や祈りを巧みに織りませ参加者の気持ちが自然に高まっていくよう、見事に構成されていた。</p>	Ms. Krisutin
8/8(月) 14:30	Mille Lacs Kathio State (インディアナ リサベーション)	<p>インディアン・オジブウェ族の居留地跡を訪れる。国道から州立公園内の道を車で約10分</p>	Ms. Kristin

日 時	日 程 ・ 場 所	主 な 内 容	協 力 者
15:00	カジノ	<p>入った湖のそばにあり、現在はキャンプ場になっている。資料館には、オジブウェ族の道具や船・住居などの模型、狩りの写真などが展示してあり、参考になった。</p> <p>オジブウェ族居留地にあるカジノを見学した。このカジノは連邦政府がインディアン居留地においてのみ認めたもので、従業員の大部分はオジブウェ族だった。お客は周辺への旅行者が多く、客専用のホテルも建設中だった。</p>	
15:30	N a y A h S h i n g s c h o o l	<p>オジブウェ族の中高等学校を訪問する。この学校はオジブウェ族がカジノの収入をもとに建設したもので、昨年11月に完成した。この地域には約1700人のオジブウェ族が住んでおり生徒数は約200人である。</p> <p>インディアンは、1921年までアメリカ国内では市民権も与えられず教育を受ける機会もなかった。1940年頃から学校へ行き始めるが様々な理由から公教育を受けることが困難な状況が続いた。そこで、インディアン独自の学校教育を求める動きが生まれ、この学校が設立されたのである。</p> <p>学校では、一般教科の他にオジブウェ族の言葉の学習や伝統的儀式であるパイプセレモニーなど民族教育に力を入れている</p>	

日 時	日 程 ・ 場 所	主 な 内 容	協 力 者
<p>8 / 9 (火) 9 : 1 5</p> <p>1 4 : 4 5</p>	<p>D. T オープンスクール</p> <p>Henly High School</p>	<p>この学校は、ミネアポリス、ダウンタウンのビル街の中心にあり、高層ビルの1階が校舎になっている。生徒数は150人で5才から13才までの生徒が通っている。校庭がないので週一回ぐらい近くの公園に遊びに行っている。</p> <p>この学校の特色は、午前中は算数・国語などの教科をやり、午後はバイオリン・彫刻・編み物などを生徒と親が選択する。また、ハローウィンや感謝祭などの年中行事も教材として取り上げ、教科の枠を越えた統合的な学習に取り組んでいる。また他の国の年中行事も積極的に取り入れ、異文化理解の為の教材にしている。</p> <p>ミネアポリス郊外の住宅地にある高校で、生徒数は916人（黒人16%、ヨーロッパ人40%、その他）である。郊外にあるので、安全面では大きな問題はないとのこと。しかし、学校の出入りのドアは1カ所にするなど、外部からの侵入を防ぐための管理は厳しそうだった。</p> <p>現在の大きな問題は、欠席者のことで、日に10%以上の生徒が欠席する。欠席理由は、経済的な要因が大部分を占める。この解決のために、出席率の高い生徒には、報酬として、お金やイベントのチケットなどを与</p>	<p>Ms. Kristin</p> <p>Ms. Kristin</p>

日 時	日 程 ・ 場 所	主 な 内 容	協 力 者
<p>8 / 1 0 (水) 1 2 : 0 0</p>	<p>Ms. Kristin SONQUIST 邸 サンクスギビングパーティ</p>	<p>えている。</p> <p>パートナーのクリスティンさんのお宅で、サンクスギビングの料理をご馳走になる。クリスティンさんの親戚も来られていて、20人近い大パーティーになった。</p> <p>= メニュー = ターキー（グレイビーソース） ビスケット（小型パン） ワイルドライス（野生の米） スイートポテト・フルーツサラダ ポテト・スタフィン クランベリー・ピクルス</p> <p>食事の前のお祈りや、サンクスギビングの歌、「ウィッシュボーン」という珍しいゲーム等を実際にで見せてもらった。</p>	<p>Ms. Kristin</p>

アメリカ合衆国と日本の高校生の 夏休みの過ごし方

広島県立広島井口高等学校	増井 宏明
鳥取県日野町立日野中学校	松原 隆
鳥取県立境水産高等学校	景山 浩之

1. はじめに

今回のプロジェクトにおいて、我々のチームが考えたテーマは、アメリカ合衆国と日本の高校生の夏休み中の生活の比較である。日本では、夏休み中も高校生が学校に来る機会が多く、生徒によっては、ほぼ毎日のようにクラブ活動をするために学校に来ている。また別の生徒は、補習期間中は補習を受け、空き時間には図書室で勉強し、他の期間も教室で勉強をしたりしている。教員も、それにともなって、補習や三者面談、クラブ指導など学校に来る日が多い。それに対して、我々が得た予備知識では、合衆国の高校生は夏休み中は学校に来ることがほとんどなく、地域の施設で過ごしたり、夏休み中の高校生向けのさまざまなプロジェクトに参加しているとのことであった。教員も、夏休み中は生徒と関係せず、別の仕事をしたり、バカンスを楽しんだりするとのことであった。

このような情報をもとに、我々は合衆国と日本の高校生の夏休み中の生活を次の4点に絞って、比較研究することとした。

- ①学習活動 ②クラブ活動(主にスポーツ) ③キャンプ ④アルバイト

2. 現地調査の方法

①学習活動については、グリーンヴィル(ミドルスクール)及びミネアポリス(ハイスクール)で、夏休み中におこなわれているサマースクールを取材した。具体的には、サマースクールの指導教員に目的・内容についてのインタビュー取材をおこなった。残念ながら、サマースクールが夏休み前半におこなわれたため、サマースクールの実際のようなようすを取材することはできなかったが、サマースクールのようすを写した写真などの資料もあわせ入手した。

②クラブ活動(主にスポーツ)については、グリーンヴィルの高校のアメリカンフットボールチームの一員である生徒へのインタビューをおこなった。また、ミネアポリスの高校で夏休み中におこなわれているアメリカンフットボール・ウェイトリフティングの練習のようすを取材した。具体的には、両種目の兼任コーチへのインタビュー、アメリカンフットボールの練習に参加している生徒へのインタビュー・アンケート調査をおこなった。

合衆国では、夏休み中は学校以外の施設を利用してスポーツ活動をする機会が多いということだったので、グリーンヴィルでは夏休み中に生徒が利用するスポーツ施設として、ティーン・センターなどの公的施設の取材をおこなった。

③キャンプについては、グリーンヴィルのあるピット郡の隣のクレイヴェン郡の2つのキャンプ場(キャンプ・ドン・リーとキャンプ・シー・ガル)の見学と指導者へのインタビュー、また、キャンプ・ドン・リーでは、参加している高校生へのアンケート調査をおこなった。一方、キャンプ・シー・ガルでは、参加者と一緒に昼食をとって、キャンプの重要なプログラムの一つである食事のようすを取材させてもらった。

④アルバイトについては、ミネアポリスで、2人の高校生のアルバイトのようすを実際に取材し、さらに彼らへのインタビューをおこなった。

また、グリーンヴィルでは、勉強をしながらアルバイトをしようとしている生徒を対象に、コンピューター操作の訓練などがおこなわれているということだったので、その先生へのインタビューと生徒数名へのアンケート調査をおこなった。

3. 現地調査

(1)現地調査およびワークショップの日程とその主な内容 (チームE)

(表中の番号は、(2)のインタビューに対応している)

日 時	場 所	内 容	協 力 者
8/1	グリーンヴィル		
9:30	ロック・スプリングスのエクストリアン・センター	D. スペンス博士により、挨拶と概要説明があった。	D. スペンス博士
10:00	ロック・スプリングスのエクストリアン・センター	今後3日間の日程の打ち合わせ。日程の確認や、訪問先の概要の説明を受けた。	H. ハジンス博士
11:00	ロック・スプリングスのエクストリアン・センター	グリーンヴィル市長及びイースト・カロライナ大学副学長の挨拶。	N. ジューイズ市長 J. ザーブルー副学長
14:00	レクリエーション・パークス・センター(①)	グリーンヴィルの高校生が利用できる公的施設を調べるため、レクリエーション・パークス・センターを訪問した。市は11の施設を持っており、中高生を含む市民全員が、娯楽・余暇活動をおこなえるようになっている。	H. ハジンス博士 C. ヴィンセント氏
14:30	ティーン・センタ	中高生、特に15~18歳の青年のため	H. ハジンス博士

	ー(レクリエーション・パークス・センターの施設の一つ)(②)	の施設である。ここを利用している高校生の多くは、社会性を養うため参加している。ビット郡のすべての生徒が利用できるが、実際の利用者は、ほとんどローズ高校の生徒である。活動はダンス・ビリヤード・卓球・映画・ボウリング・バンドなどである。	士 T・ハワード氏
15:10	アクアティック・フィットネス・センター(レクリエーション・パークス・センターの中の施設)	運動をしたい人や体形・体調を整えたい人にプール、トレーニングジム、屋内コートを提供している。この施設は、10代の若者より体調維持を目的とする年上の人々の利用が多い。	H. ハジンス博士 B. ショート氏
15:25	リヴァー・パーク・ノースの自然・科学センター(レクリエーション・パークス・センターの中の施設)	ウォータースポーツ施設・自然歩道・自然博物館がそろっている場所である。夏休み中は、高校生ぐらいの若者も少しはやってくる。	H. ハジンス博士 H. バインライト氏
8月2日			
8:45	ローズ高校(③)	グラブズ先生は、グリーンヴィル市の唯一の高校であるローズ高校で協同教育に携わっている。この教育は、勉強をしながらアルバイトをしたい生徒を対象とするプログラムである。現在38人の生徒が参加している。主としてキーボード操作やコンピュータソフトに関する知識を身につけさせて、この夏休みから仕事に就けるように教えている。	H. ハジンス博士 D. グラブズ先生
11:00	エプス・ミドルスクール(④)	エプス・ミドルスクールでおこなわれているこのサマースクールには、ビット郡全体から単位未修得のミドルスクールの生徒が参加している。このサ	H. ハジンス博士 J. ハーディ先生

14:00	グリーンヴィルの ボーイズ&ガールズ・クラブ(⑤)	<p>マースクールの目的は、単位未修得の生徒を対象に、彼らの進級が可能となるように補充授業をすることである。高校でも同様におこなわれている</p> <p>このボーイズ&ガールズ・クラブは合衆国規模の組織で6歳から18歳の子どもを対象として運営されている。夏休み中は、1日あたり75名程度の中・高校生がやってきて、スポーツ・美術工芸・コンピューター指導・ゲームなどをおこなっている。</p>	H. ハジンス博士 K. ドミニク氏
8月3日			
9:30	クレイヴァン郡の 教育委員会(⑥)	クレイヴァン郡教育委員会委員長のスニーデンさんに、夏休み中の高校生の過ごし方について、インタビューした。	J. スウォープ博士 スニーデン氏
10:00	キャンプ・ドン・ リー(⑦)	このキャンプ施設は、小学生から高校生までを対象としたサマーキャンプ施設である。ヨットや釣りやキャンプなどの活動をおこなうことにより、独立心とチームワークの育成をめざしている。	J. スウォープ博士 J. ファーマー氏
11:30	キャンプ・シー・ ガル(⑧)	このキャンプ施設は、7~16歳の男子を対象とするサマーキャンプ施設でYMCAが後援している。ロープコースをはじめとしてアーチェリー・テニス・ゴルフ・モーターボート・ヨット・水泳などができる大規模なキャンプ施設である。	J. スウォープ博士 H. デ・ハート氏
8月8日	ミネアポリス		
9:00	ミネソタ州立大学	全体の会合と、W. エンロー教授の	W. エンロー博

	の教室	講演と、R. ワンゲン先生のガイダンス。	士 R. ワンゲン先生
10:30	ミネソタ州立大学の教室	K. エンロー先生との打ち合わせ。	K. エンロー先生
13:00	オーキーズ有限会社(⑨)	アルバイトをしているアームストロング高校生のJ. フィッシャー君に、アルバイトの内容の案内をしてもらった。彼が働いている蘭栽培園は、彼の父親が経営をしているところである。	K. エンロー先生 J. フィッシャー君
15:00	K. エンロー先生の自宅	K. エンロー先生と意見交換をおこなった。 夏休み中の高校生向けキャンプの募集案内やサマースクールの案内・新聞の募集広告を見て、アメリカでは、4月や5月の段階で親や本人が夏休み中の計画をたてて、それぞれの活動に参加しているとの話を聞いた。それに対し日本では、主として学校が生徒の夏休み中の活動の場を提供しているという違いを確認した。	K. エンロー先生
8月9日			
9:20	セントポール聖堂と州議事堂の見学	セントポールの古い住宅街を車中から眺め、その後セントポール聖堂と州議事堂を見学した。	K. エンロー先生
10:15	K. エンロー先生の自宅(⑩)	夏休み中にアルバイトをしているアームストロング高校生のM. カーシュ君にインタビューした。彼は、現在、バヤリース食料品店で働いている。	K. エンロー先生 M. カーシュ君
12:15	アームストロング高校	M. カーシュ君の案内でアームストロング高校を見学した。	K. エンロー先生 M. カーシュ君

14:00	K. エンロー先生の自宅(⑩)	クーパー高校のサマースクールで特別教育を担当しているC. ラーソン先生にインタビューした。サマースクールは、学年末の単位未修得者を対象としており、アームストロング高校など学区内の高校すべての生徒を集めておこなわれている。	K. エンロー先生 C. ラーソン先生
15:30	K. エンロー先生の自宅	調査のまとめをおこなった。	K. エンロー先生
8月10日			
10:00	アームストロング高校(⑫)	アームストロング高校で夏休み中に実施しているアメリカンフットボールの活動とウェイトリフティングの活動取材した。	K. エンロー先生 T. アンダーソン氏
12:00	バヤリース食料品店	M. カーシュ君がアルバイトをしている食料品店で、彼が働いているようす取材した。	K. エンロー先生 M. カーシュ君
13:30	クーパー高校(⑬)	クーパー高校3年を担当している校長先生(この高校では複数の校長で運営している)のJ. メスナー先生にインタビューした。	K. エンロー先生 J. メスナー校長先生

(2)インタビューの内容

①ヴィンセント氏へのインタビュー(於レクリエーション・センター)

チャールズ・ヴィンセント氏は、グリーンヴィル市レクリエーション・センターの所長である。

レクリエーション・センターの努力目標は2つある。一つは、日々変化する若者の興味・関心に対応しながら、彼らが望むさまざまな活動を提供すること。そしてもう一つは、彼らが積極的に活動に参加して、充実した毎日を送れるようにすることである。

夏の期間の利用者のうち、中高生は300~400人にのぼる。主な活動は、リトルリーグ野

球をはじめとして、演劇、美術工芸、スポーツ活動などである。プログラムに参加するためには、すべて料金を必要とするが、生徒が払えない場合には支払いが猶予される場合もある。必要経費は、市の税金によってまかなわれているからである。

また、高校生のアルバイトは、法律上16歳から許可されている。この施設でも、たとえば、5、6歳の子どもたちのカウンセラーとして働いたり、ハンディキャップをもつ子どもたちのスペシャル・オリンピック開催を手伝ったりしている。

②ハワード氏へのインタビュー（於ティーン・センター）

トミー・ハワード氏は、ユース・カウンスィルのアドバイザーである。

ティーン・センター（レクリエーション・パークス・センターの施設の一つ）は、親の監督をあまり必要としなくなった中高生が社会性を養うために利用している。ピット郡のすべての生徒が利用できるが、実際の利用者は、ほとんどグリーンヴィルのローズ高校の生徒である。

この施設は、毎週、金・土・日曜日に開放され、水曜日の夜にはユース・カウンスィルの会合がある。ユース・カウンスィルとは、さまざまな活動を企画している中高生のグループで、現在、約60人のメンバーがいる。彼らの企画による活動は、ダンス・ビリヤード・卓球・映画・ボーリング・バンドなどである。また、年に4回、地方のハイウェイの2マイル清掃活動もおこなっている。こうした活動は、夏休み中よりもむしろ学期中に多く、夏の活動の中心はダンスである。

③グラブズ先生へのインタビュー（於ローズ高校）

ドリス・グラブズ先生は、ローズ高校の協同教育に携わっている。協同教育とは、公立学校と産業界を結ぶプログラムで、このプログラムに参加している生徒は、ローズ高校で授業を受けた後、それぞれの職場で働いている。つまり、彼らは学校に通いながら、仕事の実践経験を積むことができるのである。ここでは、主としてオフィス・テクノロジー、グラフィックス、キーボード操作、ワープロ、コンピューターなどの指導がおこなわれている。

ローズ高校を卒業する生徒のうち、約75%が大学へ進学する。生徒がこのプログラムに参加する主な目的は、アルバイトをして大学の授業料の資金作りをするため、あるいは自分のこづかいを稼ぐためである。新学期からは38人の生徒がこのプログラムに参加することになっており、その中には夏休みの間からすでに働いている生徒もいる。

④ハーディー先生へのインタビュー（於エプス・ミドルスクール）

ジャニス・ハーディー先生は、エプス・ミドルスクールのサマースクールで、ガイダンス・カウンセラーとして働いている。

このサマースクールには、ピット郡全体から単位未修得のミドルスクールの生徒が参加する。サマースクール・プログラムとは、単位未修得の生徒に対して進級の機会を与える

ための補充授業をおこなうことである。ここでは、英語、数学、社会、理科の基礎教科について、週5日、4週間にわたって授業がおこなわれる。授業は午前8時から12時の4時間にわたる1時限授業である。331人の生徒を22人の教員が受け持っており、クラス規模は10人から20人である。生徒たちは個々の必要に応じて個別プログラムをこなしていき、ほとんどの生徒が合格して進級することができる。

⑤ドミニク氏へのインタビュー（於ボーイズ&ガールズ・クラブ）

カーク・ドミニク氏は、グリーンヴィルのボーイズ&ガールズ・クラブの管理局長である。

ボーイズ&ガールズ・クラブは、合衆国規模の私的組織で、その活動資金は、個人や企業からの寄付によってまかなわれている。

このクラブには、6～18歳の子ども、1700人が参加している。夏休み中は、1日に500人くらいで、そのうち75人くらいが中高生である。中には、終日このクラブで時間を過ごすものもあり、ベビーシッターとしての機能も果たしている。

活動内容は、スポーツ、美術工芸、コンピューター、ゲーム、犯罪防止などである。また、リーダーシップの向上についてもクラブの主目的として力を注いでおり、年長の子どもは小さい子どもたちの良き指導者としての役割を担っている。

ビット郡の学校の教員の中には、問題行動を起こす子どもにこのクラブを勧める人もある。なぜならここには子どもにとって健全な環境があり、トラブルに巻き込まれないようにすることができるからである。

⑥スニーデン氏へのインタビュー（於キャンプ・ドン・リーへの車中）

ブラッドフォード L. スニーデン氏は、クレイヴァン郡の教育委員会委員長である。

クレイヴァン郡には、公立高校に通う子どもは全部で4000人いる。夏休み中、サマースクールに行く者を除いて、彼らのほとんどが自分の興味があることに熱中しており、特にアルバイトをする者が多い。高校生のアルバイトについては、自分のこづかいを稼いだり、家計を助けたり、さまざまな経験を積むために必要であると考えるが、アルバイトと勉強のバランスが大切である。

⑦ファーナー氏へのインタビュー（於キャンプ・ドン・リー）

ジョン・ファーナー氏は、キャンプ・ドン・リーの責任者である。

このキャンプでは、ヨット、釣り、キャンプなどの活動を通じて、独立心やチームワークの育成をめざしている。また、このキャンプはメソジスト教会によって後援されているため、信仰のための活動が重要な位置を占めている。

子どもたちは、6日間、2週間、3週間の3つのプログラムの中から選択することができる。料金はその期間の長さによって決まり、6日間で150～200ドル、2週間で250～350ドルが目安である。この料金には、キャビンの宿泊料、活動のための費用、食費などがすべて含ま

れているが、ここまでの移動費は各自が負担しなければならない。

この施設には、同時に10グループの宿泊が可能で、最大160人の子どもと55人のスタッフが滞在できる。すべての活動はチーム単位でおこなわれ、それぞれに4人のカウンセラーがいる。カウンセラーは、担当するチームの子どもたちと常に行動を共にし、同じキャビンで寝ることになっている。カウンセラーはアルバイトの大学生で、以前このキャンプを経験した者が多い。

⑧デ・ハート氏へのインタビュー（於キャンプ・シー・ガル）

ヘンリー・デ・ハート氏は、キャンプ・シー・ガルのプログラム責任者として働いている。

このキャンプは、7～16歳の男子のためのサマーキャンプ施設で、YMCAが後援している。ロープコースをはじめとして、アーチェリー、テニス、ゴルフ、水泳、ヨットなどができる大規模なキャンプ施設である。また近くには女子のためのキャンプ・シーフェアーがあり、共同して活動している。

夏休み中のプログラムは、期間が4週間で、料金は食費、宿泊費、活動経費すべてを含めて1675ドルである。同時に全部で760人の受け入れが可能である。現在、高校生の参加者は約100人いる。

キャンプの主な目的は、参加者に自信や責任感を持たせること、チームワークの重要性を教えること、そして、問題解決能力を高めることである。そして参加者は、レクリエーション活動に加えて、個別の技能や道徳性を高めるための活動にも取り組んでいる。

⑨ジェイソン君へのインタビュー（於フィッシャー宅）

ジェイソン・フィッシャー君は、アームストロング高校の生徒で、ミネアポリスの郊外、プリマスにある父親の経営する大きな蘭栽培農園で働いている。彼は7歳の時に自分の意志で働き始めた。はじめの仕事は、苗の植えかえ程度だったが、今では植えかえや種の発芽を含む農園の仕事の全責任を彼が負っている。

学期中は、月曜日から金曜日に2時間ずつと土曜日に6時間ほど仕事をしているが、夏休み中は、月曜日から土曜日の間に1日6時間ずつ働いている。給料は、1時間につき5ドル25セントで、平均的な金額である。彼は給料のほぼ半分を貯金し、残りは衣類、デート、ステレオ、車の燃料代や保険などに使っている。仕事内容や給料もさることながら、家族で同じ仕事ができるという環境も、彼は大変気に入っている。将来はできれば父の仕事を引き継ぎたいと思っている。

⑩マイク君へのインタビュー（於エンロー先生宅）

マイク・カーシュ君は16歳で、アームストロング高校の2年生である。

彼は、品質、サービスの面で州でも1、2を争う食料品店「バヤリース」でアルバイトをしている。彼の仕事はバッグボーイといって、客が買った品物を袋に入れ、車まで運ぶと

いうものである。

学期中は週に3日間4時間ずつだが、夏休み中は、最大、週に5日間5時間ずつ働いている。給料は、時給5ドルで、税金を引くと月に約430ドルもらっている。もらったお金は、衣類、デート、旅行、彼の持つトラックの保険などに使っている。また、一部はカーステレオを買うために貯金している。彼は食料品店で働くことで、客や上司とのつきあい方を学んでおり、将来のため良い経験となっている。来年もこの仕事をしようと考えている。

⑩ラーソン先生へのインタビュー（於エンロー先生宅）

キャロリン・ラーソン先生は、ホスターマン・ミドルスクールの専門的カウンセラーであるが、夏休み中はクーバー高校のサマースクールで特別教育をおこなっている。

ここでおこなわれているサマースクールは、クーバー高校やアームストロング高校を含む学区の高校生を対象としている。学年末の段階で単位未修得の教科がある生徒が参加することになっている。今年は約1000人の高校生がサマースクールに参加している。この数字は、クーバー高校とアームストロング高校の生徒の約3分の1にあたる。サマースクールは前期と後期に分かれていて、7時半から12時半の5時間ずつ12日間にわたっておこなわれる。実施教科は、英語・社会・数学・理科・保健体育である。生徒は学期中に単位を落とした教科の授業をとるが、授業は全部で60時間あり、講義と自習が半々になっている。60時間のうち7時間半以上欠席すると、単位をとることはできない。

23人の教員と3人の特別教育のための教員が働いているが、みんなが生徒に興味をもたせようと一生懸命に努力している。たとえば、医者や裁判官、警察官などを外部講師として呼んで話をしてもらったり、ビデオを見せるなどの工夫をしている。学期中の授業と比べて単位をとるのは難しくないと思うが、教員の努力にもかかわらず、サマースクールに参加している生徒のうち約3分の1は来なくなったり、単位がとれない。

⑪アンダーソン氏へのインタビュー（於アームストロング高校）

トレント・アンダーソン氏は、セント・ジョーンズ大学の4年生である。アルバイトとして、アームストロング高校アメリカンフットボール部とウェイトリフティング部のアドバイザーコーチを務めている。

スワノヴィッチ・ヘッドコーチとジョエル・ハーモン第9学年コーチたちが、アームストロング高校のアメリカンフットボール部を指導している。夏休み中の3日間のアメリカンフットボール・キャンプは、中学生を対象としており、アームストロング高校に入学予定の生徒以外でも参加することができる。キャンプの目的は、第1にフットボールに興味をもつ生徒を増やすこと、第2に基本的な技術・技能を身につけさせること、第3にお互いの親睦を深めることである。

高校生を対象とするアメリカンフットボールの練習は、8月15日から9月8日までおこなわれる。時間は、8時から10時半までと13時半から16時までの1日2回ずつあり、約60～70人の高校生が参加する予定である。こちらもどこの高校から参加してきてもよいことになっている。選手たちは、夏休み中におこなわれる州のオールスターゲームでの優勝を目標にし

て、ウェイトリフティングなどで基礎体力の向上を図り、アメリカンフットボールに必要な技術・技能を完全にマスターするように日々の練習に励む。

また、ウェイトリフティング部は、6月15日～8月11日の期間に、8時から10時までと10時から12時までのどちらかの時間帯で練習できる。夏休み中の活動内容を郵便広告で知った約100人のアームストロング高校の生徒が参加している。

⑬メスナー校長先生へのインタビュー（於クーバー高校）

ジュディ・メスナー先生は、クーバー高校3年の校長(この高校では、複数校長制を敷いている)である。

学校では、夏休み中もさまざまなクラブ活動がおこなわれている。たとえば、アメリカンフットボール、フットボール、チアリーディング、バレーボール、サッカー、テニス、水泳、ダンス、クロスカントリーなどである。このようなクラブでは、学期中と同じコーチが指導し、学期中とほぼ同じメンバーが活動している。

一方、サマースクールは、6月中旬から7月下旬までの6週間おこなわれている。この授業は、単位未修得の高校生に単位をとらせるためだけのもので、優秀な生徒をさらにのぼすための授業は、高校ではおこなっていない。

夏休み中、ほとんどの生徒が時間いっぱいアルバイトをしているが、アルバイトは週に15時間を超えないようにすべきであると個人的には考えている。それよりも、せっかく3カ月間もの長い夏休みがあるのだから、学校や地域が提供するさまざまな活動の機会を十分に利用したり、読書や体を鍛えたりして有意義で役に立つ経験を積むべきであると思う。

夏休み中、高校では、クラブ活動以外特に行事を組んだりしていない。現時点では、家庭や地域が、夏休み中の生徒の活動について考えるようになっている。学校が生徒の活動を考える日本のしくみと比べて、どちらが良い・悪いと結論づけることはできないだろう。

4. まとめ

(1)合衆国と日本の比較

①学 習(合衆国 ローズ高校・アームストロング高校 日本 広島井口高校)

類 似 点	
①	サマースクール(補習)は、夏休みに入ってからすぐ始まる。
②	サマースクール(補習)は、高校の校舎を使っておこなわれる。
③	サマースクール(補習)で学ぶ教科は、英語・数学・理科・社会などである。

相 違 点	

	アメリカ	日本
①	サマースクールは選択ではなく、必須である。	補習授業は選択制である。
②	単位取得ができなかった生徒が出席する。	学力を向上させたい生徒が出席し、だれでも参加できる。
③	全学年の生徒が参加する。	主として大学入試をひかえた3年生が参加する。
④	学区で一校しか開かれなため、違う高校から生徒が参加する。	高校ごとに開かれ、その高校の生徒だけが参加する。
⑤	学期中とは違う学校の教員が教えることが多い。	学期中と同じ学校の同じ教員が教える。
⑥	教員は、夏期の臨時の仕事としてサマースクールの仕事を選んで申し出る。	教員は、補習で教えることを申し出るがもともと教えることになっている。
⑦	生徒はどのような格好で授業に出席してもよい。	生徒は制服を着て授業に出席しなければならない。

②クラブ活動(合衆国 ローズ高校・アームストロング高校 日本 広島井口高校)

類似点	
①	たくさんのスポーツ活動がある。たとえば、バスケットボール、野球、バレーボール、テニス、水泳などである。
②	学校の施設を利用する。
③	学期と同じ指導者が、夏休み中も指導する。
④	活動時間は、1時間～半日程度である。

相違点	

	アメリカ	日本
①	クラブは、学校ばかりでなく、地域が主催するものも多い。	クラブは、学校が主催する。
②	学校には2種類の活動がある。学業を含め、水準以上の選手が参加するチームと、だれでも参加できるクラブである。	すべてのクラブ活動に、だれでも参加できる。
③	生徒は夏休み中、新しいクラブに参加できる。	生徒は夏休み中、学期中と同じクラブにしか参加できない。
④	夏休み中のクラブには料金が必要である。	クラブへの参加は無料である。
⑤	家族旅行があるため、クラブは短期間になるように計画される。	クラブは夏休みいっぱいおこなわれる。
⑥	クラブにはいろいろな年齢の選手が参加できる。	クラブには同じような年齢や学年の生徒が参加することが多い。

③キャンプ(合衆国 ローズ高校・アームストロング高校 日本 広島井口高校)

類似点	
①	生徒はサマーキャンプに参加できる。
②	キャンプには、心をリフレッシュするという目的がある。
③	キャンプは、景色のよい場所でおこなわれる。
④	キャンプでは、心身を鍛える活動がおこなわれる。

相違点		
	アメリカ	日本

①	キャンプのすべてが、民間でおこなわれる。	キャンプのほとんどは、学校が主催し、民間のものは少ない。
②	キャンプの期間は3～4週間である。	キャンプの期間は3～4日間である。
③	キャンプの指導者は鍛えられた専門家である。	キャンプの指導者は学校の教員である。
④	プログラムによって、料金が決まる。奨学金を受けることもできる。	料金は実費で、妥当なものである。
⑤	キャンプの目的は、新しい友人に出会い、新しい経験を積むことである。	キャンプの目的は、クラスや学校の友人間の親睦を深めることである。
⑥	キャンプでの活動を選択することができる。	キャンプでの活動は、あらかじめ決まっている。
⑦	主な活動内容は、各種のスポーツである。	主な活動内容は、登山、飯盒炊飯、キャンプファイヤーである。
⑧	高校生たちは、自分たちが希望する回数ほどキャンプに参加できる。	高校生のほとんどは、高校生活のうち一回だけキャンプに参加できる。

④アルバイト

類似点	
①	夏休み中、アルバイトをする生徒がいる。
②	飲酒や賭事に関係する場所での仕事は、禁止されている。
③	アルバイトで得たお金は、ステレオや衣類、レジャーなどに使う。
④	学期中に働く生徒は、夏休み中よりも少ない。

相違点	
アメリカ	日本

①	ほとんどの生徒がアルバイトをしている。	アルバイトをしている生徒は多くない。
②	生徒がアルバイトをすることについて学校は関与しない。	生徒のアルバイトを許すかどうか、学校が決定する。
③	親は人生経験のために働くことをすすめる。	親は働くのではなく、勉強することをすすめる。

(2) 学校・家庭・地域の役割

① 学校の役割

日本では、夏休み中の高校生の生活について、多くの高校がさまざまな提案をおこなったり、活動を計画・実施している。また、そうすることを地域の人々や生徒の保護者から期待されている。

これに対し、合衆国では、夏休み中の高校生は、多くの場合、学校に来ることなく過ごしている。例外は、サマースクール(単位未修得者を対象とする補充授業)を受講するために、しかたなく決められた高校(自分の高校とは限らない)に通う生徒と、自校の特定の種目(アメリカンフットボールやチアリーディングなど)のスポーツチームに入っていて、学校で練習がおこなわれる生徒である。

このような特徴は、合衆国の人々の高校に対する期待が、日本のそれと大きく異なっていることから生じているようである。クーバー高校のメスナー校長先生の発言からもわかるように、夏休み中の活動は、地域と家庭が保障しており、学校は授業がある期間にその責任を負うことになっている。現実には、夏休み期間は、教員の給与の対象から除外されており、教員が生徒と関わらなくてもよいことを裏付けている。

② 家庭の役割

合衆国の高校生の夏休みは、6月の中旬から始まるため、約3カ月間の長期間となる。これほどの期間があれば、家族旅行やキャンプなども無理なく計画することができる。一方、公的な施設・機関や私的な企業・団体も、高校生にこの期間を有効に過ごさせるためのさまざまな企画をおこない、参加者を広く募集している。ミネアポリスのK. エンロー先生の話では、4～5月の頃から、各家庭でさまざまなパンフレットを取り寄せ、新聞などに載っている募集の広告に目を光らせているとのことであった。このように、情報を十分集めるため、また数多くの情報の中でどれが本人の能力育成やよりよい体験につながるのかを吟味するために、家庭の果たす役割は重要である。

また、高校生にとって、この長期にわたる自由な時間は、アルバイトをする絶好の期間でもある。しかし、アルバイトに必要以上の時間が割かれると、他の有益な活動に参加する機会がなくなってしまう危険性もある。このため、家庭は、家族の一員である高校生のアルバイトの職種や時間についても助言や指示を与える必要がある。

③ 地域(公的機関を含む)の役割

夏休みの期間が長いため、高校生の中には、どのように過ごしたらよいかわからないものや、生活が乱れて犯罪に走るものも出てくる可能性が高い。そこで、地域として、高校生の生活が乱れないように、夏休みの間楽しく過ごせるような活動や行事を企画している。グリーンヴィルのレクリエーション・パークス・センターやボーイズ&ガールズ・クラブでのインタビューでは、特にその点が強調されていた。

合衆国では、経済的余裕と十分な情報と生徒本人のチャレンジ精神があるならば、さまざまな自己能力開発やすばらしい経験をする機会が与えられている。しかし、このことは逆に言えば、いくら生徒本人にチャレンジ精神があっても、経済的に恵まれない家庭の子であるならば、そのような機会はほとんどないことを意味している。このため、公的機関が企画する活動への参加費やボーイズ&ガールズクラブへの会費については、経済的に苦しい家庭の生徒には、支払いを猶予される場合がある。これも地域の果たすべき重要な役割の一つと考えられている。

(3)総括

合衆国の高校生は、地域や企業の専門家によって企画・運営されるさまざまなプログラムの中から、自分の興味・関心にあわせて、活動内容を自由に選択できるのである。これに対し、日本の高校生は、所属する高校から活動の場やプログラムを提供してもらっている。このため、比較的少ない予算で、誰もが高校生として必要な共通の体験をすることが可能である。さらに、三者懇談会などの機会に、経験豊かな教員から個人別の助言・提案を受けるので、個人の成績・活動状況に応じた夏休みの計画を立案し実行することができる。

合衆国と日本の高校生の夏休みの過ごし方には、このような大きな違いがみられる。この違いをみて、どちらの過ごし方がすぐれているとか、恵まれているとか結論づけるべきではないと我々は考える。むしろ大切なのは、どちらの場合も、高校生本人が与えられている条件の中で、自分自身を高めようと積極的に考え行動することであろう。

最後に、チームEの重要なメンバーとはいえ、不明確な取材計画の中で取材先を特定し、さらに調査の不十分な点についての助言と補足をおこなって下さったグリーンヴィルのH. ハジンス博士と、我々が希望したハードな日程に協力し、さらに重要な助言・意見を述べてチームEのまとめを一緒におこなって下さったミネアポリスのK. エンロー先生に対して、心より感謝の意を表したい。また、我々が十分な情報を得ることができるように、遠距離にもかかわらずキャンプ場見学に我々を連れていき、助言して下さったグリーンヴィルのJ. スウォープ博士に対しても感謝の意を表したい。